

Emily Brontë, *Wuthering Heights* 研究に寄せて

私達は、この *Wuthering Heights* を読むのに、かなりの時間をかけた。そののろくさを笑う人がいたかもしれない。始めから一応気が付いていたが、読んでいるうちに、この作品が想像以上に、難解、奇妙な作品であるということに、改めて気付いた。だから、作中に提示された多くの問題のうち、一つの問題についてさえ、ずい分討論に花を咲かせた。時には、この作品を離れて、文学、自然、宗教などの問題について議論し合い、情熱を傾けたこともあつた。そしてこの作品を読み終わつたいま、興奮のさめないうちに、記憶の新しいうちに、各自がそれぞれくみ取ったものをまとめ、書きとどめようということになった。そのため、富士山に登る道は、幾つかの異なった登山道があるように、この作品をそれぞれ異つた角度から分析してみることにした。太田藤一郎は、登場人物、Heathcliff, Catherine の性格という角度から、浜田公一は、この作品における「罪」という点から、赤木雅吾は、人間 Heathcliff の姿に焦点を当てて論じている。そして松村昌家は、19世紀イギリス小説において、この作品の占める位置といった角度から、考察を進めてみることにした。もちろん、このように細分化したけれども、それぞれのものが、互にオーバーラップすることは、はじめから判っていることであり、これは何分にも同一の作品を対象にして、4人が研究する以上、避けられないことである。また、はじめにきめておいても、執筆しているうちに、どうしても他の人の分野には入り込んでいったというような事態も生じるものである。しかし、出来るだけ互に重ならないようにと努力を払つたつもりである。したがって読みづらいことも起っているがお許し願いたい。特集に際し、一言附記いたします。

太田藤一郎

神不在の性格

— Heathcliff と Catherine —

太田 藤一郎

I

Brontë 姉妹は、その性、測りがたく、陰微、その心に浮ぶ幻想をじっと見つめていた。Emily Brontë の眼には、Haworth の荒地は美しいものとして、また倫理的な意味をもったものとして映った。その荒地の丘陵は、彼女の棲家であり、荒涼たる孤独の中に、Emily は多くの喜びを与えてくれる力を発見した。彼女の生命の糧となったものは、自由感、すべての挫折からの離脱感、荒地を吹きとおす風の烈しい颯爽感であった。Emily は烈しい、自由な荒地と孤独を愛した。“Alone I sat; the summer day”とか、“And like myself lone, wholly lone”というように、彼女の詩の中に使われている孤独という言葉は、秘やかに生きる孤独のEmilyの心を打つ、不思議な力を持っている。またEmilyは、不屈の意志、不動の自制、或る程度の残酷さと、論理的頭脳を持っていた。社会の慣習に順応した生き方を拒否する強情さがあったが、その反面では、女性本来の優しさと感受性もあり、気質は頗る興奮しやすく、精神的な愛情を渴望したと思われる。こういう性質のEmilyは、罪人は永遠に地獄に落ちるという信条を拒否して、Emilyは愛と許しの福音の中に救済のあることをみている。悪に絶対的な力を認めていない。Catherineの自尊心によって打ちすてられたHeathcliffの愛情は、一転憎悪と変わり、復讐を求め、絶望とみじめさをつくるが、最後に、あわれみに再生した彼の愛は、

希望と喜びとによって、過去の非行を償う。この点から考察すると、彼女が神の世界からではなく、人間的立場から、愛と許しを追求しようとしていることがうかがえる。彼女は不可知な、神秘のベールにつつまれた神の側から、人間を見るという従来の捉え方ではなく、人間の側から、人間の目を通して、神を捉えようとする新しい判断のもとに、彼女は神を考えようとしていると思う。それだからこそ、彼女はこれまで押しつけられてきた、神を表現する宗教上の用語、‘The Unseen’, ‘The Invisible’, ‘A Messenger of Hope’ といった言葉を避けようとする。彼女の宗教観は抽象的でありすぎるかもしれない。 *Wuthering Heights* の中で、Emily は、社会の空洞化と人為化の傾向と、その結果生じた教会の空漠さと神の消滅とを描こうとしている。この空洞化した、人為的な技巧の目につく社会こそは、イギリス19世紀の神を喪失し、形式化したキリスト教の創造した文化の一形態であると言えるであろう。その内容は、自尊心、虚栄、利己主義、偽善である。

Communication with the divine realm cannot be established calmly and beneficently. Someone must break religious and moral law and go into the forbidden space between man and God.¹

と、J. Hillis Miller が言っているように、‘the forbidden space between man and God’ は、19世紀のイギリス人が喪失している神の国であろう。この禁ぜられ、失われた神の国を見ること、神の国に入ること、これが最も重大な問題である。それでは、如何にして神の回復を計るべきなのか。ヴィクトリア朝時代の人々が与えられている既成の因襲的なモデル、教養、文化理念に従順であっては不可能なのである。この時代の人々が既に与えられている形骸化した‘religious and moral law’ から離脱し、これを打ち砕いてかからなければならない。Heathcliff と Catherine Earnshaw とは、こういう危険な領域にはいつていつたと言えるであろう。

その意味において、この二人は、この時代の世間一般にみうけられるような、常識的なキリスト教徒の類型ではない。Heathcliff, Catherine を創造した Emily Brontë の思想の背後に、或るもう一つの要素がある。創造されたものは、それぞれが互に破壊し合う関係におかれている。強くて、執念深いものが生残る。それぞれの生命は、他のものの死の上に成立する。残酷に相手の生命を奪わなければ、自分の生命が奪われる。これが人生である。19世紀イギリスのキリスト教的文化社会の立派さが、一応表面的に是認されているけれども、果してその立派さが、或る種の人々にとっても立派さとして是認されることが出来るだろうか。この *Wuthering Heights* を解明するスタートも、このあたりにあるのではあるまいか。

II

Wuthering Heights は、匿名で出版されたが、難解な作品という世評をうけた。それは、この作品が、従来の小説概念とはおよそかけ離れたものを持っているからである。他のヴィクトリア朝時代の小説には見られないような、非人間的残忍性を表わす情景が多すぎる。暴行を表現する動詞が夥しく使用され、異様な社会が与えられる。作中人物たちが、その意志を強烈に発揮している。

Continuation of life for such people depends on their continuing
to will.²

と、J. Hillis Miller によって述べられているように、彼等の意志が強烈である限り、彼等には生存の可能性がある。意志することが弱くなったり、断絶したりすると行動は緩慢になり、時間の進行も停止に近い状態となり、人物の生命も、ゆっくりと死の方向に向い、遂には消滅してしまう。したがって、この作品の中で、物語の聞き出し役になっている Mr. Lockwood は、嵐ヶ丘の Earnshaw 家で恐ろしい一夜を経験したと

ぎ, “Time stagnates here.”³ とつぶやいている。この言葉は、この作品の異常な不気味さ、残忍さを暗示する。作中人物の間には、力、意志力が存在している。その力関係の均衡が破れると、混乱は悲劇性をおびる。*Wuthering Heights* を支配している残忍さは、主として Heathcliff の無教養によって生み出される。彼は、人間社会のモラルを無視、破壊することによって、動物の状態に移行する。Heathcliff 自身の立場は、一般の人々にはうけがうことの出来ないものである。そして両者の間の力の衝突が起る。その結果、彼は、非人間的残忍性ときめつける社会のモラルなるものを破壊しようとした。このように、Heathcliff という人物は、全く特殊な存在であり、彼の不可思議な行動によって、この作品はいよいよ晦渋なものになっている。それ故、主としてこの Heathcliff に焦点をしばらくながら、この当時の人間社会の因襲的なモラルに、彼が如何に対決していったかを検討してみたい。

J. Hillis Miller は、*Wuthering Heights* の中心テーマを文明の崩壊と再建であると指摘している。たしかに、Mr. Old Earnshaw は嵐ヶ丘において、19世紀のキリスト教文化を支えてきた最後の人物であって、彼の死後、Earnshaw 家からはキリスト教のモラルは消えた。Thruscross Grange の Linton 家にしても、崩壊にひんしている19世紀キリスト教文化の氣息奄々たる最後の姿であって、自尊心、虚栄、偽善、利己主義、冷胆、その墮落、崩壊のきざしは、既に顕著にあらわれていた。

Its degradation consists in the fact that society in this region is cut off from God, living outside God's law and without His sustaining spirit.⁵

嵐ヶ丘と、その周辺社会においては、人々は神から隔離され、神は消滅しつつあったし、神の律法も權威も失われようとする段階であった。宗教心の篤いように見えているけれども、実は偽善者であり、利己主義者であ

る Joseph のゆがめられた神学が、宗教の残火にすぎなかった。人間と神との接触が失くなったことについては、Gimmerton Slough 教会に牧師がいないことによってわかる。このことは、教会が荒廃と破滅に陥る途をとりつつあることを証明するものである。

6

The church is still deserted because it is no longer necessary.

Heathcliff は、Liverpool の町からこういう環境の中に移され、まさに崩壊しようとしているキリスト教文化と対決させられるのである。

Heathcliff が孤児であったということは、彼が歴史的にも社会的にも何の規範をももっていないことを示している。孤独であった Emily Brontë の背後には社会がない。彼女の作品にも社会の動きが感じられない。彼女は、社会の影響を受けない、社会道徳から離脱した、粗野な、野生的な人間を追求する。Emily Brontë の描く恋は、醜悪で、強烈である。肉体は衰弱しきって、ただ、ぎりぎりの精神力だけに支えられている、人妻 Catherine と、恋を裏切られ、憎悪の鬼となった Heathcliff、この二人の狂気じみた抱擁を目撃して、その人間ばなれのした、異常な、醜悪な情景に、女中 Nelly はがくぜんとする。[Catherine は殆んど失神状態に近い。Catherine の安否を気づかって近寄ってきた Nelly に向って、彼は歯がみをし、狂犬のように泡をふいて、Catherine をひきよせる。

I did not feel as if I were in the company of a creature of my own species: it appeared that he would not understand, though I spoke to him; ...⁷

この時、Nelly は、常識的な社会の仲間の中に、自分がいるように感じる事が出来なかった。神の律法を犯し、人妻の誓を破った Catherine は、キリスト教社会のモラルを足げにし、非文化的な、素朴な、強烈な人間本来の姿をとる。Catherine の性格が非天国的であり、地上的、嵐ヶ丘的な

性格であることについては、

“If I were in heaven, Nelly, I should be extremely miserable.”

“Because you are not fit to go there,” I answered. “All sinners would be miserable in heaven.”⁸

このように、Catherine と Nelly との会話の中に、Catherine が罪人であることが明らかになる。彼女にとっては、天国は彼女の安息の場ではない。嵐ヶ丘こそ、彼女の究極の安息所なのである。彼女の性格が、地上的、嵐ヶ丘的であるという言葉を使ったが、この丘は、激しい風に吹きさらされている、凜烈な高地である。

No novel is more imbued with the spirit of place than *Wuthering Heights*, ...⁹

と指摘されるように、Catherine の性格が、地上的、嵐ヶ丘的、激しい動的なものであつて、決して静的なものでないこと、また彼女と嵐ヶ丘とが、不可分の関係にあることも理解される。嵐ヶ丘の本質は、力、嵐である。嵐ヶ丘の麓にある豊かな村 Thrushcross Park の本質は、落ち着いた安定感である。そしてこの二つの世界はそれぞれ対立する。嵐ヶ丘の精神を具現した Catherine と Heathcliff との恋は、19世紀キリスト教の教養によって形成された、村の豊裕な家庭に住む、所謂お上品な、紳士ぶった Edgar Linton との恋とは違う。

My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible deight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being.¹⁰

この Catherine の告白に見るように、Linton との恋は、華麗ではあるが、客観的情勢の変化によって、虚しく消える可能性をふくんでいる。けれども、Heathcliff との恋は、素朴、永遠であり、本質的であり、原始的な人間の恋の本然の姿を示すものと言える。ここに、この時代の文化に染まれない、素朴な、烈しい情熱の凝結した人間として、不可分の、不二、一体の生命体としての Catherine, Heathcliff を発見するのである。Heathcliff にたいする愛情と、Edgar Linton との恋とは、互に排除し合うのは当然のことである。嵐ヶ丘に存在しようとするなら、天国から脱出しなければならない。その行動は神にたいする挑戦であり、謀叛である。Heathcliff にたいする彼女の恋は、神にたいする挑戦、神の律法にたいする違背なのである。愛と宗教的義務との間のこの対立が、Catherine が Heathcliff に関係を持ちはじめたときから発生した。

H. and I are going to rebel —we took our initiatory step this
¹¹
 evening.

これは Catherine の日記の一部分である。Hindley の虐待と宗教の重圧を忍んできた Catherine は、社会的にも、政治的にも、宗教的にも、何ものにもとらえられない人間として生きる自由と愛とを求めた。Catherine と Heathcliff は、調理台の下に身体をひそめ合って、その狭い場所を二人の自由の空間と見做し、また乳搾り女の外套をかむって、荒地をかけまわることに関りない自由を味わうことが出来た。この二人にとって、荒地こそは、自然の素朴な自由生活を象徴するものであり、二人の子供時代の生活が、既に社会文明とか、既成の因襲的なモラルからはずれていたことが、J. Hillis Miller によって指摘されている¹²。二人は19世紀のキリスト教をはねのけて生きようとする自然児である。長い文明の歴史が、人間と人間との間に、人工的な障壁を、たとえば生活習慣、道徳規範などの障壁をつくって、人間本来の性質、姿勢を変えたのであるが、それにも拘らず、こ

の二人の人間としての眞の性質は変えられていない。社会の理性、道徳が破壊されるあかつきには、再びその純粋な、もとのままの姿を現わそうとしているのである。ところが、この時すでに、Hindley は、都会の教育を受けたこと、都会の女と結婚したことによって、彼の体質は改変させられ、Catherine, Heathcliff の世界から脱落している。二人には、反抗が死を意味するという意識すらない。二人の世界には、何の妥協性もない。あたかもそれは嵐ヶ丘の世界である。動的で、強烈である。これに反し、Edgar Linton の世界には、妥協性があり、静穏な、天国的性格で、社会的、常識的世界である。ところが、その Catherine が Linton 家の犬に足をかまれ——この事件は彼女がキリスト教文化の洗礼をうけたことを象徴する——、数週間Linton家のキリスト教文化に支えられた、豊裕な家庭生活を経験したために、彼女は、この時代の特徴の一つである、虚栄の美酒を味わった女性に変貌した。その結果、Heathcliff との結婚は彼女自身を墮落させるものであると考え、Edgar Linton と結婚する。その結婚を決意するにさいして、彼女は Edgar と結婚しても、その結婚は、彼女を Heathcliff から引離すものではないと信じている。何故なら彼女と Heathcliff は “more herself than she is” であり、“I am Heathcliff! He's always, always in my mind” であるからである。彼女は Edgar Linton の金銭を利用して、Heathcliff を高め、Hindley の暴力の圏外に彼を置くことが出来ると信じた。この考えは、Heathcliff の内在的、純粋な神性を、形式化した、不純な文明が作り上げたモラルで、汚濁化しようとすることを意味する。

既に述べたように、Emily Brontë は、19世紀のキリスト教文化の社会にたいして、強い反感を持っていた。彼女の反感の対象として攻撃されるのが、繊細、虚弱、お上品で、野卑と暴力には為す術もなく悄然となる、血の気の少ない Linton 家である。もともと、粗野、気儘、頑固な、おてんば娘、反抗的、情熱的、自由奔放な Catherine には、世間並みな生活

をしようとする意識はなかった。この意識が彼女の心の中に生じたとき、彼女は世間的常識の世界の女、即ち Linton 家の一員となり、作者のえらんだ攻撃者 Heathcliff の攻撃目標に加えられる。Linton 家は、実は強い利己主義、階級的意識を示す家庭なのである。Linton 家の老夫妻, Edgar, Isabella などは、利己主義的であり、自尊心が強く、思い上っている。

“...; would it not be a kindness to the country to hang him at once, before he shows his nature in acts as well as features?” ...
Isabella lisping—“Frightful thing! Put him in the cellar, papa.”¹³

これは、Heathcliff が Linton 家で悪党として、冷たんに取扱われる場面であり、Linton 家では、犬さえ Heathcliff をうけ入れない。作者は Linton 家の所謂社会的常識の世界を、キリスト教文化の世界を示し、Linton 家の俗物根性を、またその俗物根性に染められた Catherine の変貌をいきどおる。足の負傷が治って、嵐ヶ丘に帰ってきた Catherine は、これまでの自然児ではなかった。お世辞と美しい衣裳に飾りたてられ、美しい貴婦人になっていた。汚れた顔、汚れた手の Heathcliff が、彼女を迎えようとしたとき、衣裳の汚されるのを心配した彼女は、後に身を引いて、彼の思いを拒否した。彼女の自尊心と虚栄にかられたこの行為は、Heathcliff をしてむき出しに反抗させる。

“You needn't have touched me!” he answered, following her eye and snatching away his hand. “I shall be as dirty as I please: and I like to be dirty, and I will de dirty.”¹⁴

美しくなった Catherine が、汚いものから遠去かろうとする。逆に汚なかった Heathcliff が、美しいものを憎悪して、いよいよ汚たなくなろうとする。こういう手法を使用して、作者は皮肉に Catherine の俗物性を攻撃する。汚たなくなってやるということは、Catherine の本質を変えた

Linton 家の教養と称するものにたいする彼の反発、憎悪感の意志表示である。

“I’m trying to settle how I shall pay Hindley back. I don’t care how long I wait, if I can only do it at last. I hope he will not die before I do!”

“For shame, Heathcliff!” said I. “It is for God to punish wicked people; we should learn to forgive.”

“No, God won’t have the satisfaction that I shall,” he returned. “I only wish I knew the best way! Let me alone, and I’ll plan it out: while I’m thinking of that I don’t feel pain.”¹⁵

ここに引用した部分は、Hindley の虐待にたいして、Heathcliff が復讐の決意を Nelly に打明ける場面の描写である。Nelly は神の司る処罰権を主張すると同時に、人間は愛と許しに生きなければならないという立場をとる。しかし、Heathcliff の心の叫びを通して、われわれに判明することは、彼が自分自身の意志で動くことの出来る存在、即ち人間である、神の権力を無視し、神に代つて、その権力を遂行することの出来る人間であるということである。彼に比べると、Edgar Linton は自らの意志によって行動することが出来ない。神に、即ち当時のキリスト教文化がつくった社会的常識に縛られ、その指示にそって動く人形にすぎない。Heathcliff の生命は Catherine との愛である。この愛は普通の常識的な恋ではなく、生きることそのものである。したがって、嵐ヶ丘の精神を具現した存在の一人と見做される Catherine が、彼の身边から稀薄になっていくにつれて、彼の生命も薄れていく。彼は Linton 家によって現わされる社会文化の破壊者であり、知識欲、学問愛から絶縁させられた存在であり、彼自身この時代の文化から離脱、挑戦しようとする存在である。ジプシーのような浅黒い皮膚、気むづかしい、乱暴な、悪魔的な、そして愛憎の情に強烈

でありすぎる彼は、人間性の果てに生存するかに見える。エネルギーの化身であり、荒地の精神であり、文明への反抗者である。

His often larger-than-life qualities partake of the elements that usually go into a legendary character: unknown birth, the suggestion of demonic origin, a veritable prince of darkness in his embodiment of anti-social forces.¹⁶

Heathcliff に関する Frederick R. Karl のこの批判は、よく正鵠を得た分析である。けれども、Heathcliff は、その性格が極端に走りすぎ、ともすれば、人間の世界を離脱して、非人間的的存在になる危険におち入りがちであるが、彼は矢張り、ぎりぎりのところで、人間としてふみとどまっている。神の教示をうけなくても、自己の生活条件を創造することの出来る、原始的な人間として生きる。社会から離れていた、孤独な Emily Brontë は、この Heathcliff をして、彼を追放した社会の中に、彼の立場と愛を求めさせるためには、たとえ神の示す道にそむいても、彼の前に存在するものすべてを一掃させている。この点から、Frederick R. Karl はこの *Wuthering Heights* を “a kind of anti-Paradise”¹⁷ と評し、

Heathcliff is outside sin and guilt, as are the other character in contact with him. They live as if they were original man and woman making their own terms without the dictates of a god.¹⁸

このように、Heathcliff, Catherine を original な性格であると指摘している。

嵐ヶ丘の建物の狭い窓が、壁に奥深く取り付けられているのと同じように、Heathcliff の黒眼も、うたがわしげに深くくぼんでいる。この描写から、Mr. Lockwood は、嵐ヶ丘と Heathcliff との密接なつながりを発見している。黒い服、黒い顔、黒い髪 of Heathcliff, まるで悪魔的な力を与

えられた彼は、三年ぶりに嵐ヶ丘に帰ってくる。彼を迎えて狂喜する Catherine にたいして、女中の Nelly は、キリスト教徒化していない Heathcliff の不変性を見破っている。実は、Heathcliff は、未開の、原始的な ‘dark’ の世界の人間であり、彼が夢寐にも忘れ得なかった Catherine は、文化的な ‘light’ の世界に移住して、キリスト教徒化した人形的存在に変わりつつあった。そこで、彼は、Edgar Linton の妻になっている Catherine の裏切行為、自殺行為を非難し、彼女を死に追いつめる。表面的に観察するならば、Heathcliff は、Linton 家の平和の破壊者であるだろう。けれども、神の御心に反して、彼女を本然の姿に、位置に引き戻したという点から考えるならば、彼は Catherine の救主であると言える。彼女は、Edgar Linton の妻となり、Linton 家の宗教に同化し、その家の信仰する神を救主としてうけ入れ、常識的世界に所属する一存在となったと誤認する。そして、Heathcliff をキリスト教社会の仲間に入れる可能性が近付いたと誤認した瞬間、彼女は彼女の本性を見失う。

“The event of this evening has reconciled me to God and humanity! I had risen in angry rebellion against Providence.”¹⁹

このように、Catherine は神と人間とに和解したと述べ、彼女は自らを天使だと言う。しかし、彼女のこの言葉は、実は彼女の身勝手、自己満足、そして矛盾を示すものである。だから、Nelly によって、In this self-complacent conviction she departed; ... と皮肉られる。Catherine は、

“Should the meanest thing alive slap me on the cheek, I’d not only turn the other, but, I’d ask pardon for provoking it; ...”²¹

このように、一方の頬を打たれたら、他の頬を打たせると言う。これは神の言葉であり、彼女の God への和解を示すものである。また続いて彼女は、“...as a proof, I’ll go make my peace with Edgar instantly.” と言

っているが、実際には、彼女は夫 Edgar から自分の頬を打たれることを許さないであろうし、また彼女が折れて Edgar と仲直りをすることもないだろう。それ故、彼女は “The event of this evening has reconciled me to God and humanity!” とは言いながらも、これは、そのときの勢に乗った彼女の心にもない言葉である。実際には、彼女には神はない。彼女は異端者なのである。彼女が魂の永遠の救いを求めるためには、自分の葬られる墓地を、教会の Linton 家の墓地にではなく、嵐ヶ丘を望む戸外に求めたのである。

人妻になった Catherine が Heathcliff の帰来を知ったとき、彼女は失った恋の行方を悟った。この愛こそが、彼女の生命を支える vitality である。Catherine の vitality の源泉が Heathcliff にあるとするならば、彼女の正体は一体どのようなものであるか。この作品は或る意味では復讐小説である。復讐の主演者は Heathcliff である。人間は、奪われたものを充足しようとする本能をもっている。また人間の普遍的な欲求は、自己の外なる何物かと結合したいと願う。その願望の強弱によって、人間はそれぞれ異なった存在となる。Heathcliff にとっては、Catherine は彼の魂であり、彼女を失って、彼は無の深淵に腹ばうのである。彼は彼女に征服され、彼女の奴隷に甘んじ、その苦悩を他の奴隷にぶっつけて、うっぶんを晴そうとする。こういうサディスト的な態度が、彼独自の復讐形式なのである。Heathcliff の復讐は、彼の人間回復を示すものである。ego の意識が復讐を実行させる。神に一任することが出来ない。したがって、彼は復讐の成果を得るため、精魂を打ちこみ、自らの手でこれを行なったのである。

...; he is much more a primordial figure of energy.²²

と、Walter Allen が Heathcliff の性格を決定づけているし、また S. D. Neill は、

Heathcliff is not evil. He represents a source of dynamic energy

which has been denied a creative outlet through love.²³

Heathcliff の dynamic energy を指摘する。復讐が、彼を原始的な人間にさせる。彼と Catherine は、二つに分裂した流れにも似ている。分裂している限りは、それぞれの流れは呪われ、その前途によこたわるあらゆるものにたいする破壊活動が生じる。けれども、二人が結合したとき、調和とバランスが回復される。そのためには、この二人が同じ世界に生きる可能性、同質の性格であることが必要である。既成道徳の社会の側から判断されるとき、Heathcliff は純粋でないと定義される。実際は彼は純粋な人間なのである。Tess の場合にも同じことが言える。即ち、一般に正常だと思われている既成のモラルから判断されると、彼女は純粋な女性ではなくなる。しかし、異常と認められながらも、実はそれが純粋の人間社会であるその立場から判断されるとき、Tees は純粋な女性である。Catherine の場合においても、彼女が精神的に苦しんでいるとき、夫は書齋にとじこもり、利己的で、冷たんで、自尊心に支配された。純粋性を失った社会的常識家である。Edgar の眼からみて、妻の Catherine が異常であるとうつつたとき、実は彼女の純粋性は、夫の文化社会を排除して、ただ原始的、非文明の土地である荒地のこと、そしてその土地に住む Heathcliff のことだけを、彼女に意識させる。Catherine にとっては、Edgar Linton は見知らぬ人であり、彼女が彼の妻になったことは、本来彼女の世界である嵐ヶ丘から、彼女が流罪人、追放者になり、彼女が物質文化の中に入ったことを意味する。それ故、彼女は肉体的な人間、女になり、時には、Heathcliff と Isabella との接近にたいして嫉妬する女性ともなる。このような状態になる以前の Catherine, Heathcliff の結合は、性的な関係によるものではなく、精神的な結びつきである。この点に、Catherine, Heathcliff の素朴、純真な原始性を発見することが出来る。

“I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free ;

... I'm sure I should be myself were I once among the heather
on those hills.²⁴"

もしも、再び嵐ヶ丘に帰ることが出来れば、彼女は、野蛮で、勇敢で、自由な、本来の彼女自身の姿に戻れることを確信している。ここに、Edgar Linton の現わす文化、人工的世界と、Heathcliff, Catherine の現わす非文化、即ち原始的な、純粹世界との対立が示されている。そしてこの対立と同じように、Catherine の肉体と魂とは分離し、肉体は Edgar Linton の手許に押し止められ、魂は Heathcliff によって、神を超越した偉大な力、神をおそれない彼の異教徒的な、原始的な力によって救出される。彼の復讐は、彼女の救出にほかならない。

III

キリスト教精神が衰微し、無力になるにつれて、人間社会は汚辱化し、偽善化し、俗物が生れる。醜悪な人生において、人々の幸福は、神によって与えられるのではなく、愛によって与えられる。神の力が人間の上にまだ強大であった時には、人間の悪、汚れた行動は、神の前に告白することによって、神の許しがあり、人間は清められ、人生の楽園、家庭の幸福が保証せられた。けれども、不幸にも神の声はとぎれた。この作品の中で神の教えの媒介者を自負している Joseph は、実は偽善者で、彼は本質的には神の代弁者ではない。彼は救いの祈りをしない。彼は、形式的儀礼や伝統を重んじ、その精神を没却し、聖書あさりをする、最もうんざりする、ひとりよがりのキリスト教徒である。彼によれば、神はすべてのものの創造主であり、その神に仕える道は、神に代って、彼が悪しき人々にたいして呪いの言葉を吐くことである。したがって、Joseph の神は、憤怒の神である。19世紀のキリスト教的教養の弱さに気づき、北歐的な自然の中に生きる人間の偉大な力に心をうごかされ、人間として生きる人

間の強い生き方を求めて、所謂紳士らしい生活態度を攻撃しようとした作者 Emily Brontë の胸奥には、この時代の神の影響をとどめていない。この時代の人々は、神を求めたけれども、彼等が求めた神は、彼等が求めようとした神とは違うということがわかった。その結果、人間は現実たにいして幻滅感を抱いた。そして、この神と、人間と、現実生活と、幻滅感とは、この19世紀後半のイギリスの重大問題の一つであると言えよう。Edgar Linton は、こういう19世紀キリスト教的教養の世界に生きる人達の一人である。彼が利己主義者で、所謂紳士らしい人物であるのは、この時代の無力化したキリスト教的教養の弱さを示す一人の典型である。彼の対照として、異教の世界に生きる、原始的な純粋さを持った、強力な Heathcliff が考慮されている。この作品に見られる斬新さは、神に挑戦するこの Heathcliff の創造にある。社会から追放された彼は巨人性を持っている。彼は生来の巨人的な力によって、19世紀のキリスト教のつくり出した教養と正義の世界に攻撃をかけた。Heathcliff と Catherine とは、肉体は分離していても、魂は分離していない。二人は同じ一つの生命体であり、彼女の物理的な死が訪れても、精神的には矢張り、生命活動が持続している。それは Heathcliff の生命の中に現存している。彼の生命の維持、永続は、Edgar Linton を、また彼の城を支えているところの社会的地位、財産を破壊するためのものであることを意味する。ここにこそ、Heathcliff の存在理由があり、彼の物理的な死は、Edgar Linton の死と、彼の財産が Heathcliff の手に入った後に実現されることになっている。

Heathcliff は、Linton Heathcliff, 二世 Catherine, Edgar, Nelly を征服する。彼は二世 Catherine を激しく叩く。男性が女性を叩くという行為は、この当時の作品にはあまり見うけられない暴行であって、彼が一市井人でないことを示している。彼は愛した Catherine の肖像画を自分のものにし、Edgar Linton の死後、彼の肖像画を足でふみにじる。彼だけが demon に似た存在にまで変質する。他の登場人物は、社会構造の一部

として生きる人間であり、あくまで人間の領域から出ない。Heathcliff は、プリミティブで、本能的で、純粹であって、因襲的なモラルをつくった一般社会のうけとめる神を否定する存在である。彼は神不在の世界を、嵐ヶ丘を象徴する。まだ神の力の余燼がのこっている世界に属する人々、即ち既成の世界が、彼の手によって消されていく。彼の巨人性、即ち vitality は、既成道徳の見地からすれば、悪と見られ、19世紀のキリスト教精神の立場から、彼を異教徒と見、悪の具現者とみる彼の悪は、神を拒否する立場、即ち反キリスト教精神から生れるところの sin である。彼は Catherine の幽霊を信じる。この点において、彼は anti-Christianity であり、pagan である。19世紀の知識人の信じる神、たとえば、Emily Brontë, George Eliot, Matthew Arnold などの信じる神は、人間の内部にはいり込んでくる神、人間に内在する神、人間性の価値と尊厳さを認める神であって、中世において見られたような、人間社会にはいり込めない、はるか人間の頭上に、遠い、高所にあるような神ではない。Heathcliff, Catherine の求めようとした神は、前者の神であり、Edgar Linton や Joseph の見ている神は、後者の神である。だから、Catherine が、Edgar Linton の妻の座に坐る誘惑にかられたとき、

“*Here! and here!*” replied Catherine, striking one hand on her forehead, and the other on her breast: ...²⁵

と彼女は、自分の本質を、内在する神を裏切ろうとする矛盾した自殺行為の苦しさを、Nelly に訴えている。Heathcliff, Catherine は、Joseph を罵り、祈禱書を足げにし、彼は偽善者だときめつける。Heathcliff は、Edgar Linton の冷たい心が彼女の生命を奪ったと痛憤する。Joseph, Edgar Linton は、Heathcliff を神をおそれない悪魔だ、地獄におちる運命にある非人間だとののしる。これはそれぞれが倚る神の世界が違うのである。人間らしい性質を持たないと攻撃される側の Heathcliff, Catherine

たちに、むしろ人間的な生き方を求めようとする真剣な、血みどろの手さぐりが認められ、教養人として生きていると自認している側の Edgar Linton に、真の意味の人間的な愛情の深さ、真剣な生活態度が、実は欠如していることが認められる。

二世 Catherine が、書物のある Linton 家から Heathcliff の策略によって嵐ヶ丘に強制的に移され、書物のない生活を余儀なくされる。彼女は、Heathcliff の執拗な復讐に沈黙していることが出来ず、彼を罵る。

“You *are* miserable, are you not? Lonely, like the devil, and envious like him? *Nobody* loves you—*nobody* will cry for you when you die!”²⁶

この罵りしが、Heathcliff を刺激し、彼の心の奥底を、まるで嘔吐するように、すっかり吐き出させてしまう。その描写は、彼のこれまでの耐えてきた魂の苦悶の叫びであり、この作品の圧巻の一つである。Hareton は Heathcliff の若い頃の化身とも考えられる。Linton Heathcliff の死後、二世 Catherine と Hareton とは互に接近し合い、Thrushcross Grange 邸の植物を嵐ヶ丘に移植する。このことは、嵐ヶ丘の原始的な体質を、文化的に変えようすることを意味すると同時に、Heathcliff の闘争と復讐とに明け暮れた生命の消滅していくことを暗示する。故 Catherine にそっくりの Hareton、二世 Catherine の眼差しは、最初 Heathcliff の心を苦しめたが、次第に彼の心をやわらげはじめ、彼は復讐をよろこぶ力を失うようになる。Hareton、二世 Catherine の生存は、故 Catherine の魂の永遠の具現を示すものであり、Hareton の容貌こそ、Heathcliff の不滅の愛の亡霊である。これは人間の immortality を示すものである。復讐行為による財産の獲得も、Heathcliff のよろこびとはならず、彼は次第に変化し、明るく、快活で、うれしげで、戸外の散歩を好むようになる。これは当時のイギリス社会の物質主義にたいする、作者の精神の皮肉、反発

のあらわれであろう。ここにも社会的地位、金銭、名誉、偏見などにたいする人間的愛情の対立がある。物質の世界をあらわす Edgar Linton によって、Catherine をうばわれた Heathcliff が、復讐を決意したとき、彼は物質崇拜の世界の人物に変化する。けれども、復讐がとげられると、彼は愛情の世界に復元し、財物に執着もなく、ただ、故 Catherine の名をつぶやきつづける。13歳のときから、非キリスト教的生活をokった彼の天国は、19世紀キリスト教の天国ではない。

“..., you have lived a selfish, unchristian life; and probably hardly had a Bible in your hands during all that period, ... and how unfit you will be for its heaven, ...”²⁷

また、彼は無知、素朴、純粹、原始的な存在である。“The way you’ve passed these three last days might knock up a Titan.”²⁸ という Nelly の Heathcliff をいさめる言葉によっても、彼がギリシャ神話の巨人にも匹敵し得ることが明らかにされる。そのHeathcliff、キリスト教にたいする異端者、巨人が、遂に倒れる日が訪れる。人間は彼自身の死を経験しようとするとき、至高の自由な存在に変貌する。魂の解放が生じる。彼の肉体の消滅、死は一体何を意味しているのだろうか。彼は自己の肉体を殺すことによって、魂の至福を発見しようとした。そこに彼の魂の救済がある。

Emily Brontë の領域は精神的な現実である。この作品においても、物質的、肉体的な死の現象は、一つの終局を示すものではなくて、実際には精神の解放となっている。そして、生者と死者とは共存し、互に交流し合っている。Emily Brontë の世界は、神の自由にならない、神の手のとどかない世界である。*Wuthering Heights* の人達は、互にあわれみも、許しも持たない。人間と人間との間に、人間と神との間にあるものは、敵対と憎悪である。人生の掟として幅を利かしているものは、破壊である。神は、人間と人間とを対立させる。現世においては、永遠の生命と、豊かなよろ

こびのある天国の永遠性を、無難には持つことを誰も許されない。また、孤独の苦しみを逃れる道は誰にもない。この時代の神は、人々の概念によって歪曲された神であった。真のキリスト教精神を失ったこの時代において、Catherine, Heathcliff などが、人生の巡礼者となったのである。人は地獄におちる罪を犯していると同時に、人はすべて救われる可能性があり、死の瞬間に神の救いの恩寵を受けることの出来る人もあると信じていた作者は、是等の巡礼者に、この時代の人生のむごい戦いを経験させることによって、本当の天国は何処にあるか、人間の本当のあるべき姿は何なのかということを追求しようとしている。

The climax of Emily Brontë's drama of history is a universal halocaust in which all the sin and suffering of man and the animal world, through being endured and worked out to their bitter end, will be transfigured into the happiness of heaven : ...²⁹

既成の形あるもの、すべて崩れ去るとき、人間の罪障すべてこれ、天国の永遠の幸福にその形を変えられる——これが、彼女の作品の結末である。因襲的なモラルを形成し、その上に安住していた、形式化した神は、Emily Brontë のよしとする神ではない。彼女の求める神は、正義と慈愛とを行なう神であり、この作品のテーマは、世俗性と人間の高潔さの戦いである。

中世以後の文学には、人間社会から次第に神が消えていくことが記録されている。社会の近代化にともない。この傾向は著しい。18世紀においては、神はまだ少なくとも社会の中にあつた。19世紀になると、神は存在していると信じている作家もあつたが、神は社会から消えている。それは神が死滅したのではなくて、実際には、人間の手のとどかないところに存在していた。人間と神を結びつけた糸は切れ、多くの作家たちは、神は最早存在しないと考え、神の不在を悟った彼等は、各自の特殊な形態で、神の

不在を表現しようとしている。George Eliot は、religion of humanity を神に代るものとした。けれども、この神不在の発見は、人生に幻滅感を与え、悲劇作品を招来した。けれども、Catherine, Heathcliff は、人生の真の目的地とも言うべき死を契機に、二人の欲望に払うに死を以てし、彼等の求める神の国に復帰している。この当時の社会によってうけ入れられていた神によって、二人に課せられた離別と孤独を、果敢に打破り、現世の神の規範を脱しようとした結果、二人には結合の幸福が与えられている。二人の神は、二人の心の中にある神であり、荒地の風であり、二人をつつむ愛の力である。彼等の愛は、制度化した宗教を不必要なものとなし、この墮落した社会に、新しい天と地とをもたらした。自尊心、虚栄、利己主義に支配された社会は、神の回復をまっぴらしてはじめて本来のものになる。その神は、愛と許し、即ち humanity の顕現である。愛は裏切られて憎悪と化し、憎悪は Heathcliff を復讐にかり立て、許しを認めさせない。けれども、憎悪、復讐が、彼を満足させなくなったとき、後に残されたものは、愛と許しである。ここに Emily Brontë の宗教がある。

註

- 1 J. Hillis Miller, *The Disappearance of God* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1963), p. 209.
- 2 *Ibid.*, p. 167.
- 3 Emily Brontë, *Wuthering Heights* (London: Everyman's Library, 1966), p. 22.
- 4 Cf. J. Hillis Miller, *op. cit.*, p. 208.
- 5 *Ibid.*, p. 208.
- 6 *Ibid.*, p. 211.
- 7 Emily Brontë, *op. cit.*, p. 138.
- 8 *Ibid.*, p. 67.
- 9 Walter Allen, *The English Novel* (London: Phoenix House, Ltd., 1954), p. 186.
- 10 Emily Brontë, *op. cit.*, p. 69.

- 11 *Ibid.*, p. 16.
- 12 Cf. J. Hillis Miller, *op. cit.* p. 177.
- 13 Emily Brontë, *op. cit.*, pp. 40-41.
- 14 *Ibid.*, p. 44.
- 15 *Ibid.*, pp. 50-51.
- 16 Frederick R. Karl, *An Age of Fiction* (Toronto: Ambassador Books, Ltd., 1964), p. 77.
- 17 *Ibid.*, p. 89.
- 18 *Ibid.*, p. 89.
- 19 Emily Brontë, *op. cit.*, p. 84.
- 20 *Ibid.*, p. 85.
- 21 *Ibid.*, pp. 84-85.
- 22 Walter Allen, *op. cit.*, p. 187.
- 23 S. D. Neill, *A Short History of the English Novel* (London: Jarrolds Publishers, Ltd., 1954), p. 177.
- 24 *Ibid.*, p. 107.
- 25 Emily Brontë, *op. cit.*, p. 66.
- 26 *Ibid.*, p. 246.
- 27 *Ibid.*, pp. 285-286.
- 28 *Ibid.*, p. 285.
- 29 J. Hillis Miller. *op. cit.* p. 200.